



TITLE:

備後の名[勝]山野峽(猿鳴峽及古谷川の峽谷)(二)

AUTHOR(S):

吉野, 益見

CITATION:

吉野, 益見. 備後の名[勝]山野峽(猿鳴峽及古谷川の峽谷)(二). 地球 1933, 20(2): 125-133

ISSUE DATE:

1933-08-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/184185>

RIGHT:

性 (diversité) のあるであらう所の、更に廣い地區を求めることが必要である。

かかる廣い國土に於いては、吾人は、その市民郷土人の生命の躍進の總和が、著しき社會的躍進 (élan social) なる一の全體をなすを見るであらう。この社會的躍進なるものは、住民の共通に有するあらゆるものの總和であるが、それは、時に應じて、經濟的領域に於ける、又、道德的、知的領野に於ける、種々なる行動行爲の源動力ともなることを得るのである。其れ故、科學的進歩を獎勵鼓舞せんとする心懸けを有するものは、人文地域なるものの分析の仕事に對

して注意を拂ふ理由を大いに有する譯である。此の種の研究に於いて、ヴィダル・ド・ラ・ブラーシ[†] (Vidal de la Blache) が、學校教育に於いて、將亦その「佛蘭西地理敘述」(Tableau de la Géographie de la France) の中に發表した理念の作用の下に、佛蘭西地理學が一の先驅者となつたことは、佛蘭西地理學の榮譽である。尙、之れを實用上より論ずるも、吾人が人文地域に於ける全體の理念に従つて働く場合には、吾人は危險なる斷裂を避け得る機縁を有する譯である。

(昭和六年稿、昭和八年五月三十一日補足)

備後の名勝山野峽 (猿鳴峽及古谷川の峽谷) (二)

吉 野 益 見

二、北 部 (奥峽)

此峽谷は概して直線をなすも、節理のために

小屈折をなす所あり、こゝに大なる正面瀑懸り風致の豪壯なるもの多く、淵瀬及深林美の存在

は亦南部に同じ。

龍門 河床巨岩の累積する所、樹木其上に生育するあり、樹下岩に踞して勝景を望む。累積岩は堰堤の用をなし河水を堰き止む。左右兩岸は六米の高さ峽壁相對立すること三十六米に達し、其節理の露出及浸蝕の狀態は自然美の優秀なるものなり。此兩壁の間は長方形の深潭を湛へ、満水洋々藍より青く、所々島嶼的奇岩の點在は其單調を破りて變化を與へ一般の風致を添ふ。尙兩岸の楓樹等は斜に交叉し潭上を覆ひて投影し更に幽邃森嚴を加ふ。峽壁の盡くる所、遙に二段の瀑布懸る。**第一段瀑**は東西走向の節理面に懸り、左右兩端に二條となり、左岸瀑は直立四・二米、右岸瀑五・五米、蕩々咆哮一の瀧壺に飛下す、此瀧壺は長七米幅五・二米あり。**第二段瀑**亦節理面の右岸より一條となり直立六米浩々深潭に飛下し、頗る壯觀を極む。尙此深潭下位の左岸に側面瀑**白糸瀧**懸る、水少なく幅狭さも高さ甚大なり、降雨増水せば奔騰飛下雄

第八圖 龍門

龍門の中央部より其奥部の瀧を寫す



壯を極むと云ふ。此龍門の成因を考察するに、此磐岩は横及縦の節理を有すれば、嘗て深潭入門の瀧壺(今の巨岩累積地)に飛下せし懸瀑が流水浸蝕のため、永年に漸次後退し瀧壺は長き深潭と變じ現狀を呈するに至りしものなり、即ち節理と浸蝕との二作用による、尙今後も漸次後

退し二段瀑は一段瀑となり峽壁深潭愈々長からん。累積岩より峽壁を通し二段瀑を透視するの景、即ち深潭、峽壁、奇岩、綠樹、飛瀑等の勝景を一眸に集めば、涼風自ら起り身心恍惚暑の移るを知らず、蓋し峽中の大偉觀絶勝の一にて三段峽六大壯觀の龍門蜘蛛淵の景に比すべし。

夫婦瀧 前者を隔つる百餘米に在り。先づ一條の瀧途中左右に分れ二條となりて深淵に飛下し、こゝに渦巻き頗る豪壯を極む。斜長二十三米。直立五米。是亦節理面に懸るものにて、水聲鞺鞳谷を壓す。

龍頭瀧 前者を去る百米に在り。

概説 河の屈折部に在る正面瀑にて、粘板岩の東西走向の節理面に懸り略々北より南の方向を取る（此節理に直交の南北節理も存す）、上下二段をなし、上段瀑は緩斜面に、下段瀑は急斜面に懸れば、瀧壺よりの觀望には上段瀑は隠れて存在を認めず。前者は斜長二十四米、直立六・四米。後者は直高三十三米。合計直高三九・四

米、斜長五十七米あり、普通二百尺と稱するは斜長全體を意味するものなり。

特説 上段瀑。こは河水が河床の南北節理を浸蝕して生成せるものなり。其河床は高低二段に分れ、高き部には東西節理面の右端に二段の小瀑懸り、高さ各々一米に満たざるも、水勢激昂侃々壯烈を極む。其河床の中央に横臥せる巨岩のため瀑水之に衝激し流向を更に右轉す。次に低き部には磐岩流水浸蝕のため溝狀路を作り僅に>字形に曲る、瀑水は此緩斜を一條に白龍の如く奔下し下段瀑に入る。其所の瀧口は垂直的に見れば、U字形に浸蝕されてV字谷の底に穿たる、V字谷の側壁には左岸の頂に松楓、右岸には檜楓椿等繁茂し、兩岸壁には岩松忍草岩豆等生育し、更に青々の風致を加ふ。かく高部の上段瀑は今節理面の右岸に懸るも、左岸に河水浸蝕の痕跡を認むれば、古くは左岸に懸りしものにて、流轉巨岩左岸より中央に横臥せるため流路を右岸に變じ現狀をなすに至りしものな

り其巨岩の下に甌穴存し茲に昔の流路を證し、
徑一米のもの、又徑〇・五米、深〇・三米のもの
ありて石臼狀をなす。

第九圖 龍頭瀧 (下段瀑)



下段瀑 こは斷層によりて生じたる東西走向
の節理面の垂直の岩壁に懸るものにて、其岩壁
の中部には僅に小突起を有す。上段瀑の白水は
瀧口より一齊に放奔す、忽ち上部の岩壁を衝撃

するものは、碎けて數條となり飛下し、更に中
部の小突起を衝くものは細雨となる。忽にして
下部の岩壁を撃つものは雲霧濛々たり。此等の
瀑水は岩壁面を離るゝもの多きも、又之を傳は
り小流となりて白絲の如く落下するものありて
更に變化景趣を添ふ。此瀑は水の上幅二米、下
幅五米、勢威猛峻盪擊飛躍の狀は白龍の昇天に
髣髴たるものあり。水聲鞺鞳咆哮溪谷に轟き百
雷の一齊に落つるに似たり。

瀧壺 略々圓形をなし、周邊に巨岩多く、其
湛水の徑十五米、最深二米なるも、瀑水飛騰旋
廻の狀は實に雄渾のものなり。若し夫れ大雨至
らば瀑水は其幅を増すのみならず、遙に瀧壺の
中央に激射四散して雲霧となり、冷氣迫り觀客
永く鑑賞する能はずと云ふ。

觀望所 一は岩窟にて、瀧の正面瀧壺の周邊
に在り、間口十一米、高三・六米、奥行五米あ
り、これ大水の際、瀑水の浸蝕作用に基き形成
せられたるものなり。茲にベンチの設あり、雨

中と雖も座がらに下段瀑の全景を仰眺し得。二は鎌ヶ峰にて、瀧の岩壁面に交叉し、南三十度西の走向を有する馬脊地なり、其西面は古谷川の峽谷、其東面は斷層崖をなす。此峯の尖端に近く松其他綠樹の茂るあり、險を戒めて茲に至らば上下兩段瀑飛躍の雄姿を合せて同時に瞰下鑑賞し得。

上段瀑の高き部は水路の變遷を認むるも、下段瀑は依然幼年期の狀態を永續す。此瀑は其高さ水量崇高偉大、雄渾壯烈等の點に於て峽中の首位を占め、三段峽の三段瀧に對比し得べく、彼は三段高さ三十米、此は二段高さ四十米等の差あるも、均しく是れ天下の名瀑たり。備中の碩儒阪谷朗廬翁の詩著名なり、曰く、
秋氣漲天關、龍隱大壑間、半身躍未沒、餘勢震千山。

板岩 前者を溯る少許の河中に石英斑岩の露出あり、水平節理を有し板岩を作る、清水之を流下し、數段の美しき小瀑をなす、猿鳴峽の大

ノベラに似たり。

瓢淵 長き瓢に似たり、長さ十八米、深二米半、瓢口には二段の小瀑飛下す、兩岸は石英斑岩屹立し、尙楓樅等は淵上に交叉し、頗る幽邃閑雅の蓬萊境なり。

二段瀧 長方形の深潭にて、長さ十一米、幅其半、深三米あり、兩岸は削立せる粘板岩にて之に茂れる楓樅等は紺碧を覆ひて暗し、此淵に飛躍する下段瀧は斷崖面の左岸及中央に懸り、其上の上段瀑は斜長十五米（直立五・五米）に達す。何れも滔々殷々頗る壯觀を呈す、秋は兩岸の紅葉燃ゆるが如し、故に此瀑を紅葉瀧とも名づく。

扇子淵 前者に接し扇子狀をなす。長徑十二米、短徑九米左岸には楓樅茂り、淵上に鬱蒼たり、左岸に偏する清流は大岩壁面に懸り、蕩々浩浩扇要部に飛下し雄壯を極む、斜長七・五米（直立四・五米）

此瀧より上流二十米間は流急なり、奇岩怪石

の横はるもの多く、流は此間を迂廻し急湍をなし、又多くの楓樹は其上に茂り、變化ある景趣を表現す。

三つ瀧(魚切、天龍瀧) 前記の奇岩に踞して仰視す、龍頭瀧と同じく是亦正面瀑なるが、彼が略々北より南の方向に懸るに反しこは略々西より東の方向に懸り、三つに見ゆ故に三つ瀧と名づくるも、實は四段瀑をなす。或は魚切とも稱するは斷魚の意なり、又天龍瀧と呼ぶは其形態に因むか。此瀑は斷層に生成せるものにて、組成岩は千枚岩質粘板岩なるも、細小なる石英脈の通ずる部あり、略々南北及東西走向の兩節理を有す。

第一瀑(最高瀑) 直立四・六米(斜長七・六米) 幅四・二米、一條の流は滔々として南北の節理面に懸り、長さ七米の瀧壺に躍入す。

第二瀑 第一の瀑水は、直立六・六米(斜長十四米)、幅五・五米の南北節理面を轟々として奔下す、されど瀧壺を缺く。

第十圖 三つ瀧

南方より北六十五度西に向ひ寫す



第三瀑 第二の瀑水を受け、殷々として飛躍す、其直立三・三米(斜長八米)、幅七米あり。長さ三・六米の瀧壺に流入す。

第四瀑(最低瀑) 南北節理面は幅七米直立九米あり、第三瀧壺の清水は沛然浩蕩として、此岩壁面を躍下す、水幅三米あり。

瀧壺 橢圓形をなす、長徑二十三米、短徑十二米、右岸は磐岩削立、東西走向の節理平行せるもの、又水平節理存し、奇岩將に墜落せんとするものあり。左岸は傾斜面にて楓樹之を充たす。瀑水飛騰の光景は實に壯觀を極む。

此瀑は全直高二十四米(斜長三十九米)、流向は全體として西より東を示すも、或は右岸より左岸へ、左岸より中央への曲流存し變化をなす。全瀑の水勢頗る強烈、殊に第四瀑に至つて甚しく、水煙濛々衣裳悉く濕ふ。瀑聲侃々囂々咆哮幽谷に轟き、大河の堤を決するが如し。此瀑は龍頭瀧に對比すべきものにて、彼は二段男性瀑、此は四段女性瀑たるの差異あり。尙此は三段峽の三つ瀧(高三十米)と其成因及狀態を同ふし之に對比すべきものなり。

觀望所 (一) 瀧壺に接する積の巨岩上の眺は、低さより高さに向ひ全景を仰觀するに適す。されど聊か中段に眺め得ざる所あるを憾む。

(二) 第一瀑の頂 近く高さより低さを瞰下し部分的の觀察に至便なるも、第四瀑を眺め得ざる缺あり。左右兩岸より全瀑を一眸に眺むる地點に、觀望の設備を要す。

北部の概括 此區域は正面瀑六を數へ瀧の各種を含む、就中龍門龍頭三つ瀧の如き絶勝は、三段峽の龍門三段瀧三つ瀧に、それぞれ對比すべきものにて、又三段瀧三つ瀧と、龍頭瀧三つ瀧との峽中の位置はそれぞれ全く符節を合するが如き亦一奇なり。

古谷川峽谷總括 要之此狹は淵瀨及瀧の河床景に特色を有し、殊に瀧は其眞髓をなし、又深林美はよく之を修飾し、三段峽の河床景に髣髴す。此峽も猿鳴峽と同じく、風致を損壞せざる範圍に於て、水面に近く歩道の開鑿をなし、以て鑑賞の便を圖るを最大急務とす。

四、鑛 泉

イ、鷹の湯

こは古谷川峡谷右岸に湧出す、前述すれば省略す。

ロ、原谷鑛泉

古谷川と原谷川との合流點より後者を溯ると約六百米、左岸に冷泉湧出し、其對岸に浴場兩岸に宿舍の設備あり。鑛泉は古生層砂岩中に長さ一・八米幅〇・九米橢圓形の小井を穿ち、其底部は長さ〇・三米の裂罅より湧出して、甚しく變色を示す、満水のときは深二米餘に達す。泉水は攝氏十六度なれば、釣瓶にて汲上げ浴場に送致し火温を加ふ。此鑛泉に對し、大正七年十月、市立大阪衛生試験所北所長岩尾技師の試験報告書あり、之を摘録すれば、

無色澄明、弱アルカリ性の反應を呈し、比重は攝氏十五度に於て一・〇〇〇五六なり、定量分析をなすに、每一リットル中に含有する主要成分の瓦量左の如し。

蒸發残渣…〇・二三六〇 クロール…〇・〇四
 〇一 硫酸…〇・〇一五四 硅酸…〇・〇二六〇

第十一圖 原谷鑛泉

左 冷泉、中 宿所、右 浴場及宿所



カリウム…〇・〇〇二二 ナトリウム…〇・〇五
 九八 マグネシウム…〇・〇〇〇三 カルシウム…〇・〇〇二八 鐵及アルミニウム…〇・〇〇
 一五 炭酸及有機物…痕跡。

又別に明治十餘年に廣島縣より調査せし主要

成分表に依れば

アルカリ炭酸硫化水素（臭氣はこの存在による、以上二種は少量）。石灰苦土硫酸鹽酸硅酸（以上五種痕跡）。礬土鐵硼酸（以上三種僅微）。千グラム中固形物質量〇・三六とあり。

效能 切疵、皮膚病、神經痛、癱瘓質斯、痔疾、婦人病等に效果最も著し。此鑛泉沿革の初は得て詳にし難さも、明治十三年九月營業出願十四年十月認可あり以て今日に及び、浴客は夏季に最も多く一日七十人に達す。

此鑛泉の東方に三百六十米の一高峰聳立す、原谷川及小田川に對し狹穿分脈的位置に在り觀望の一中心をなし、西、北、東の三面に蛇曲の清流を眺め、東北に田原、西南に下原谷の聚落を瞰下すべく、東南に馬乘山の秀峰を仰ぐべし、泉客はこゝに杖を曳き、南して岩屋權現を

拜し洞窟に清冷を納れ、北して古谷川及猿鳴峽の名勝を鑑賞し、悠々自適せば到る處に仙郷あり浩然の樂を養ふべし。此地方が二鑛泉を有することは帝釋峽及三段峽の及ばざる大特色の一なりとす。

鷹の湯については其附近適切の地に浴場を新設し、原谷鑛泉は漸次宿所其他の改善を必要とす。

五、參考圖書

陸地測量部五萬分の一地形圖（井原及油木圖幅）。地質調査所府中圖幅併に府中圖幅地質說明書（赤木健氏）。原谷鑛泉試驗報告書（岩尾技師）。

此實査と此稿とは、縣岡太課長吉田氏の厚意と、并に山野村の藤井定市、藤原村長、谷本助役、兒玉校長、水田喬一、菅田賢一、吉岡隆雄等諸氏指導解説との賜なり、茲に深く感謝の意を表す。